『家庭科教育』65巻5号, 1991年4月号, pp. 84～87

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎伝

第一部　あるジャーナリストの生い立ち (1)

佐々木　享
（名古屋大学教授）

大正から昭和へ

東京、奈良の両女子高等師範学校（お茶の水女子大学、奈良女子大学の前身校）は、中等女教員養成のための官立学校であるとともに、実質的には戦前の女子の最高の教育機関であった。長い間両校はそれぞれ別個の方式で入学者を選抜していたが、一九二六（大正十五）年八月の「高等師範学校及女子高等師範学校生徒募集規程」の制定により、両女高師の入学者選抜に関する基準は統一された。これに伴って、両女高師は翌二十七年度から入学試験の実施方式を統一した。

統一方式による両女高師の最初の入学試験は、同じ期日、同じ科目で（ただし出題内容は違う）、一九二六年の年の瀬も押し詰まった十二月二十五日の朝九時から、内地九か所（東京、奈良、札幌、仙台、金沢、松江、広島、福岡、那覇）と「外地」と呼ばれていた植民地五か所（京城、台北、旅順、豊原、青島）で一斉に始められた。この日は、歴史（文科志願者のみ）、物理・化学（理科、家事科志願者のみ）、英語、国語（解釈）（この二科目は各科共通）の学力検査が実施された。

ところで、この日早朝の午前一時二五分、葉山御用邸で病気療養中であった大正天皇が崩御し、摂政裕仁親王が直ちに践祚（せんそ）した。天皇崩御の報は午前三時三五分、浜口雄幸内相名で各地方長官に電報で知らされ、そのあと、前年から放送を始めたばかりの東京、大阪、名古屋のラジオ三放送局も臨時ニュースを流したという。テレビやラジオが全国くまなく普及した今日とは違うにせよ入学試験がどうなったかは気にかかるところである。この日に奈良女高師会場で東京女高師文科を受験した前田美稲子によると、試験は予定どおり実施されたという。第二日には、数学、国語（文法）、国語（作文）の三科目（各学科共通）が実施された。

政府はこの二十五日に官報号外を発行し、大正十五年十二月二十五日以後を「昭和」とすると告げた。これによると、一九二六年十二月二十五日は大正十五年でもあり（この日付の官報は既に発行されていた）、昭和元年でもある。ただし、昭和元年の官報第一号は十二月二十六日付だった。一九二七

年度の両女高師の入試は、大正から昭和にまたがって実施された。

昭和元年は、一週間足らずで終わった。

金融恐慌に始まった昭和時代

明けて一九二七年、昭和時代は、金融恐慌に代表される不安の時代として始まった。

喪の最中という一月二十日、若槻内閣は政友会と政友本党の内閣不信任案に対抗して帝国議会の停会命令を出すなど、政界は相変わらず政争に明け暮れていた。そして三月十四日、片岡直温（なおはる）蔵相は衆議院予算委員会において、まだ破綻したわけではなかったのに東京渡辺銀行が破綻したと失言した。これを契機に京浜地域の銀行は庶民が先を争って預金をおろしに来る取付け騒ぎに襲われ、応じ切れなかった東京渡辺銀行、あかぢ貯蓄銀行などは相次いで休業に追い込まれた。こうして金融恐慌が始まった。

四月に入ると、頼りにしていた台湾銀行からの貸出が停止された大手商社の鈴木商店が破綻し、八日には同商店系の第六十五銀行が休業、株式は再び暴落した。十七日には関東大震災以来の不良貸付を抱えていた台湾銀行救済のための緊急勅令案が枢密院で否決されたため、翌十八日には同銀行の内地支店が一斉に休業、これを契機に市中銀行は再び取付けに見舞われた。

二十日に成立した田中義一内閣は、二十二日、枢密院の議を経て金銭債務支払いを三週間延期させる緊急勅令を公布、即日施行した。いわゆるモラトリアムである。

雑誌『家事及裁縫』の創刊

昭和史の幕が開いたばかりで物情騒然としていた一九二七（昭和二）年四月、雑誌『家事及裁縫』が創刊された。発行所は東京家事講習所。編集発行人は宮原小治郎であった。この『家事及裁縫』誌は、のちに『家事裁縫』『家政教育』と改題し、今日の雑誌『家庭科教育』へと連綿と続き、発行所は今日では家政教育社となっている。宮原小治郎は現在の社長宮原健雄の父、『家庭科教育』編集長宮原佑弘の祖父にあたる。

『家事及裁縫』創刊号には、時の文部大臣岡田良平が祝辞を寄せている。岡田は、文部官僚出身の政治家で、一九二四（大正十三）年以来二度目の文相の職にあり、大正末期の一連の教育改革を積極的にすすめていた。順送りに大臣のポストにありつく伴食大臣とはわけが違う。女子の「家事」必修化を含む二六年の高等小学校改革も、彼が熱意をこめてすすめてきた施策の一つであった。まだ海のものとも山のものともつかない雑誌に、一市井人にすぎない宮原小治郎がいかなる手づるで祝辞をもらってきたかも興味あるところだが、それにもまして、創刊号を現職文部大臣の祝辞で飾るというこ

の雑誌にこめる宮原の気迫には圧倒される。

ところで、この四月二十日、つまり『家事及裁縫』創刊号が読者の手元に届くころには、内閣の倒壊に伴って、文部大臣は岡田良平から三土忠造に代わっていた。岡田の祝辞が文相末期に書かれたものであり、市中に雑誌が出回るころにはその職になかったこと自体、ただならぬ時期にこの雑誌が誕生したことを象徴していた。

出版文化の新時代とともに

しかしながら、昭和史の幕開きを暗い世相一色に塗りつぶして描くことは事実に反する。

改造社が大正最末期の一九二六（大正十五）年十二月に第一回配本をした『現代日本文学全集』は、爆発的売れ行きを示した。続いて新潮社が二七年三月から『世界文学全集』の刊行を始めた。円本時代の幕が開いたのである。一冊一円という予約販売方式からこの名が生まれた。全集方式の刊行物が陸続したことは、一般庶民が新しい出版文化を受け入れ始めたことを意味した。それは、第一次世界大戦を経て、日本の社会の基底部分が少しずつ変わり始めたことの表れだったとも見られよう。相次いだ金融恐慌を経て中小の金融機関が急速に淘汰されていったことも、新しい時代の産みの苦しみだったと言える。

そして二七年七月には、円本の流れにさおさして、「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」という美文調のマニフェストを添えて『岩波文庫』が発刊された。一九八七年までの六〇年間に最も多く売れた『岩波文庫』一〇冊の中には、この第一回に発刊された『ソクラテスの弁明・クリトン』（売上げ部数第一位、一二〇万部）、『藤村詩抄』（第八位、七五万部）が含まれている（『岩波文庫総目録』一九八七年、による）。ひろく求められる教養の幅が広がり、深くなってきたと言えるのではなかろうか。

雑誌『家事及裁縫』もこうした新しい波に乗って順調に船出した。

五十八歳の編集主幹

これからしばらくのあいだ、宮原小治郎というジャーナリストの生い立ちと編集者としての足跡を追ってみようと思う。

正直に言うと、私は、初めから宮原小治郎という人物に格別深い関心を持っていたわけではない。ことのいきさつは、大空社が『家庭科教育』誌の戦後初期の部分、すなわち第二十巻第一号（一九四六年四月号）から第三十四巻第十四号（一九六〇年十二月号）までを復刻するにあたり、同社からこの雑誌の「解説」執筆を求められたことに端を発する。

今回復刻されたのは、研究者などから需要が多いのに見つけにくい戦後初期の部分のみである。しかし雑誌自体は一九

二七年創刊で、既に六十余年という教育雑誌としては稀有に長い歴史を持っている。この雑誌はまた、その間一貫して家庭科――戦前にあっては「裁縫」「家事」――という特定の教科にしぼって誌面を構成してきた特異な性格も持っている。戦前・戦後にわたって刊行されてきた雑誌が少ない上、一つの教科に焦点を合わせてきた雑誌となるとほとんど他に例がない。

歴史の長さという点で類例を求めるとすれば、『職業指導』の名で、『家事及裁縫』誌の翌二八年に創刊され、戦後に改題して現在に及んでいる『進路指導』誌くらいのものであろう。しかしこの雑誌には、文部省の外郭団体である大日本職業指導協会（戦後に「大」の字をとる。現在の進路指導協会の前身）という強力な母体があった。『家庭科教育』に次ぐ長い歴史を持つ『家庭科学』誌には家庭科学研究所という後ろ盾があり、そのうえ同誌は月刊ではない。これらに比べて『家事及裁縫』の発行所であった東京家事講習所は、後に詳しく述べるが、雑誌発行の二年ほど前に宮原が始めた一私塾にすぎなかった。強力な母体も後ろ盾もなしに、雑誌統廃合の嵐をくぐり抜け、戦前・戦後にわたってひたすらこの雑誌を守り育ててきたところに宮原の面目があった。こうしたことを私は「解説」に書き込んだ。『家庭科教育』は家庭科教育史研究の素材の宝庫であることとあわせて。

『家庭科教育』誌創刊者についての解説は、右に述べたことだけでも足りるはずだった。しかし、雑誌を創刊した時の宮原小治郎が既に五十八歳だったと知ったことは驚きだった。

私たちは、五十歳で隠居してから天文学を学び、五十五歳から日本全土の実測という今考えても気が遠くなるような事業に乗り出し、七十歳を超えるまでそれを続けた伊能忠敬（一七四五―一八一八）の事績を知っている。

伊能の名が広く知られているのは、彼が、日本中を歩き、当時可能な限りの正確な知識に基づいて国土を実測して科学的な地図を作るという困難な事業を大成させたからである。同時に、五十五歳からこの難事業に挑んだという事実が人を驚嘆させてきたことも確かである。まれに見る偉人とされるゆえんである。こういう人物はめったにいるものではないという常識が私たちにはある。五十八歳で雑誌の編集主幹になる前は中等学校――高等女学校と商業学校の体操教師だったという宮原小治郎の生涯は、この常識を突き崩すものだった。

昭和時代に生きた雑誌編集者を、百余年前に日本全土を歩いて測量を続けた伊能忠敬と比肩するのはいきすぎと言われよう。そう言われることを承知の上でなお、昭和初年の男女の平均寿命はまだ五十歳に達しなかったことを思い合わせ、何の後ろ盾もないまま五十八歳で雑誌を創刊し、八十歳を超える年までそれを持続、発展させるために力を注いだ事実は、やはり刮目すべき壮挙だったと言えるように思う。